

2024 年度 総合研究所研究チーム活動（最終）報告書

2026 年 3 月 31 日

甲南大学長 殿

研究代表者（所属・職名・氏名）

経営学部・教授・北居 明



研究課題 組織における道德の不活性化の研究

研究期間 2023 年度～2024 年度

研究メンバー 経営学部・教授 北居 明

文学部・教授 大西 彩子

助成額 2023 年度 1,000,000 円

2024 年度 1,000,000 円

1. 研究成果の概要（A4 縦置き 10 頁程度）

別紙参照

2. 研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は、次の 4 点にまとめられる。

第一に、道德不活性化を日本の職場文脈で大規模データにより実証し、理論の一般化可能性を高めた。

第二に、道德的アイデンティティを内在化と象徴化に区別し、内在化は抑制的、象徴化は促進的に道德不活性化と関連することを示した。

第三に、罪悪感と恥を分けて分析し、道德不活性化が自己意識的道德感情の予期を低下させることを明確にした。

第四に、非倫理的向組織行動に加え、関係性攻撃まで含めて検討し、道德不活性化の影響範囲を拡張した。

社会的意義については、次の 3 点にまとめられる。

第一に、企業不祥事や職場の非倫理的行動を、「一部の悪意ある個人」ではなく、誰にでも生じる心理メカニズムとして理解する視点を提供した。

第二に、表面的な倫理アピールや評価が、かえって逆効果になりうることを示し、倫理研修・コンプライアンス施策の見直しに重要な示唆を与えた。

第三に、道徳不活性化がハラスメントや関係性攻撃とも関連することから、職場の人間関係トラブル予防にも応用可能性がある。

3. 研究開始当初の背景

国際的には道徳不活性化と職場行動の研究が進む一方で、日本の企業・職場を対象とした大規模な量的研究は限られていた。文化的特徴（集団主義、責任の分散、自己肯定感の低さなど）を踏まえた検討の必要性が指摘されており、日本独自の文脈で理論を検証する研究が強く求められていた。現実社会においても、企業不祥事は依然として相次いで発生しており、日本企業を対象とした道徳不活性化の研究は強く求められていたといえる。

4. 研究の目的

日本企業で働く人々を対象に、道徳不活性化の先行要因およびその影響について、定量的に研究を行う。

5. 研究の方法

インターネット調査を通じた匿名アンケートによる大規模定量研究

6. 研究成果

道徳アイデンティティの二つの側面（内在化と象徴化）が道徳不活性化に対し、それぞれ異なる影響を与えていることを実証した。また、道徳不活性化が恥や罪悪感の予期に与える影響、および非倫理的な組織行動や関係性攻撃に与える影響を経験的に明らかにした。

7. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕

計 0 件（うち査読付論文 0 件／うち国際共著 0 件／うちオープンアクセス 0 件）

〔学会発表〕

計 2 件（うち招待講演 0 件／うち国際学会 0 件）

〔図書〕

計 0 件